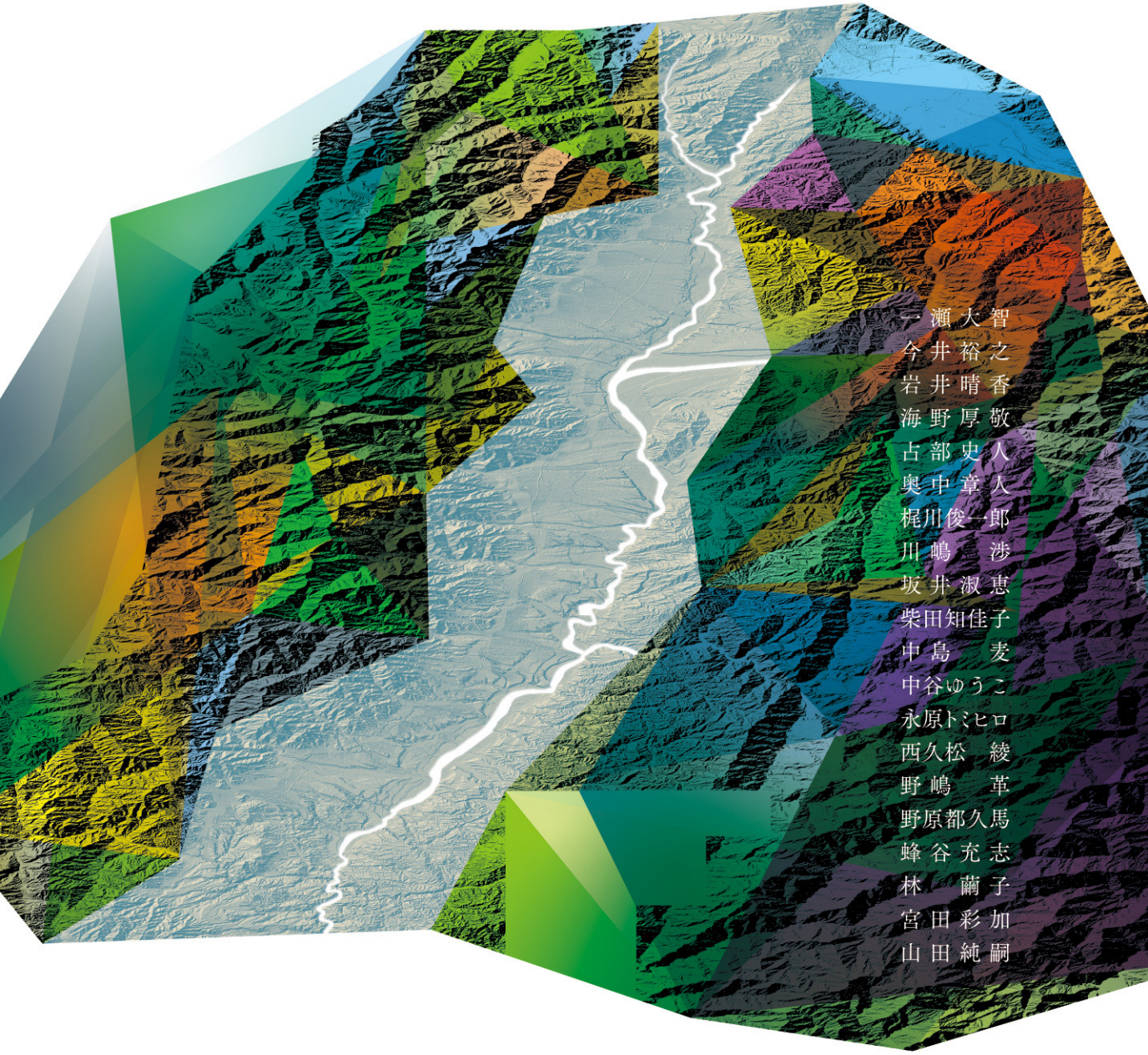
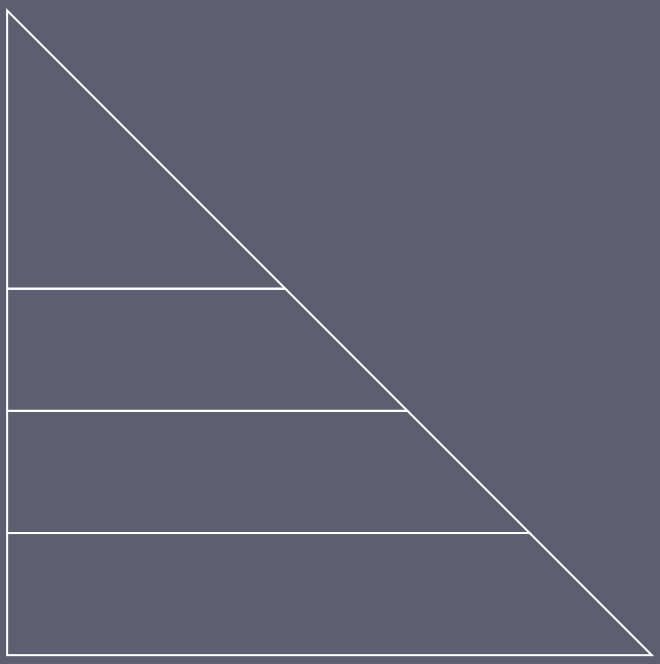
美術と風土 Art & Regionality Exhibition
INADANI represented by Artists

アーティストが触れた伊那谷展





美術と風土 ― アーティストが触れた伊那谷展 ―

Art & Regionality Exhibition INADANI represented by Artists

会期　2023年 3 月25日～10月 9 日

主催　公益財団法人 きょうと視覚文化振興財団

長野・飯田市美術博物館	3 月25日～ 4 月16日
長野・辰野美術館	4 月29日～ 6 月 4 日
大阪・豊中市立文化芸術センター	6 月16日～ 7 月 7 日
京都・白沙村荘 橋本関雪記念館	7 月16日～ 8 月13日
愛知・碧南市藤井達吉現代美術館	9 月 5 日～10月 9 日

25 March—9 October, 2023

organized by

Kyoto Foundation for Visual Culture
Iida City Museum, Nagano
Tatsuno Museum of Art, Nagano
Toyonaka Performing Arts Center, Osaka
HAKUSASONSO Hashimoto Kansetsu Garden and Museum, Kyoto
Hekinan City Tatsukichi Fujii Museum of Contemporary Art, Aichi

Foreword

Inadani included in this exhibition's title is a part of Nanshin region in Nagano prefecture. The area is surrounded by the Central and Southern Alps, where Tenryū River from Lake Suwa in the north goes down and Tenryū Valley rises in the south. Today Inadani is easy to reach by Chūō freeway via Mt. Ena Tunnel from Nagoya. But this region used to be difficult to access with the only means of transportation by Iida line, and Chūō line ran along Nakasen-do Road between the above two Alps. However, it was not secluded but a place famed in poetry that appears in *Man'yōshū* and other waka anthologies. "Hahakigi" in Sonohara is a chapter title of *The Tale of Genji*. And Tessai Tomioka visited twice the historic places there. Iida is also the birthplace of Shunsō Hishida, a pioneer of the modern Japanese-style painting.

Before this exhibition, we invited twenty artists active in Kinki and Tokai regions as well as Inadani to the above area so as to inspire them to produce new artworks or to choose among their past works those which harmonize with this exhibition's concept.

We requested an executive committee composed of museum curators and gallery owners who have dealt with modern art in Kinki and Tokai regions as well as Inadani to choose the core artists mainly before their sixties and added the venue's opinions. Some artists did not participate in the exhibition due to circumstances.

Dividing the participants by three fields of two-dimensional, three-dimensional, and installation art, the first consists of fourteen artists, the second three, and the third three. Or dividing them by traditional genres, there are four Japanese-style painters, eight Western-style painters, one sculptor, two engravers, two craft artists, and three contemporary installation artists.

We hope the artists, viewers, and their intermediators communicate with each other to create new things through this exhibition, whose title is "Art and Regionality". They will deepen their concept of the interaction between art and regional climate.

We would like to express our appreciation for all the efforts of the persons concerned.

2023

Organizers

開催に当たって

名称に含めました「伊那谷」とは、南アルプスと中央アルプスに囲まれた長野県の南信地方の一部を指す言葉で、そこには北の諏訪湖から出た水が周囲の山々から出てくる水流を合流させて流れる天竜川が南下し、その南端は天竜峡と呼ばれる険しい渓谷によって囲まれた地域が中心をなします。そこは今では中央道が走っていて、名古屋から恵那山トンネルを抜けてそこに行くのは簡単ですが、それ以前は飯田線による交流が主な交通手段で、中央線は中央アルプスの西側のいわゆる中山道を走っていました。では人里離れた地かというとそうではなく、万葉集をはじめ歌に詠まれた地であり、源氏物語には園原の帚木（ははきぎ）（ヒノキ）が巻名になっていたり、明治には富岡鉄斎が二度にわたって近くの遺跡を訪ねたりしています。また飯田は近代日本画の礎を築いた菱田春草の生誕地でもあります。

本展はこうした地を、近畿・東海そして伊那谷などを中心に活躍してきた20名の造形作家に訪れてもらい、そこで得られたインスピレーションを手掛かりにした作品が出来ればそれを、出来なければ過去の作品を出品していただいて、一つの展覧会に構成したものです。

作家の選定に当たっては、同じく近畿・東海・伊那谷などで長年活躍してきた美術館の学芸員や現代美術を対象にした画廊経営者に、まずは実行委員会として基準となる作家たちを選定してもらい、加えて開催館の意向を取り入れて決めさせていただきました。選定させていただいた作家でも事情によってご参加いただけない作家もおられたし、おおむね還暦以前の作家を主としたことなどをここに付記させていただきたいと思います。

出品作家を平面・立体・インスタレーションの三分野で分けてみますと、平面が14名、立体が３名、インスタレーション系が３名となり、旧来のジャンルで分けてみますと、日本画家が４名、洋画家が８名、彫刻家が１名、版画家が２名、工芸家が２名、現代美術インスタレーション系作家が３名となります。

このような展覧会を通じて、作家と鑑賞者そしてその仲介をつとめた者たちがお互いに交流を深め、新たなるものを生み出す一つの契機になれば幸いです。

それは本展の主たる名称とした「美術と風土」という呼称にも通ずることと考えており、美術はその土地土地の風土と如何に影響しあっているかを再考する契機にも致したいということでもあります。

最後になりましたが、ご協力賜ったすべての方々に厚く御礼の意をお伝えし、開催に当たってのご挨拶とさせていただきます。

2023年

主　催　者

Committee for the Art & Regionality Exhibition INADANI

Chairman	Harada Heisaku
Vice Chairman	Nakatani Nobuo
Vice Chairman	Nakatsuka Hiroyuki
Observer	Kishi Fumikazu
Secretariat	Irie Suzuo
Members	Amano Kazuo
	Kimoto Bunpei
	Nakatani Yoshihiro
	Hitomi Junko
	Makimura Yosuke
	Yamawaki Saeko
	Kawashima Shu
	Tamatomi Kayo
	Tanaka Sakiko
	Kita Rima
	Hashimoto Shinji
	Ono Shunji

「美術と風土 ― アーティストが触れた伊那谷展 ―」実行委員会

委員長	原田平作	大阪大学名誉教授、きょうと視覚文化振興財団理事長
副委員長	中谷伸生	関西大学名誉教授、きょうと視覚文化振興財団理事
副委員長	中塚宏行	美術評論家、元大阪府立現代美術センター主任研究員
オブザーバー	岸　文和	同志社大学名誉教授、きょうと視覚文化振興財団理事
事務局	入江錫雄	きょうと視覚文化振興財団事務局長
実行委員	天野和夫	天野画廊代表
	木本文平	碧南市藤井達吉現代美術館館長
	中谷至宏	成安造形大学特任教授、京都市美術館学芸アドバイザー
	人見ジュン子	ギャラリーヒルゲート代表
	槇村洋介	飯田市美術博物館副館長補佐兼学芸係長
	山脇佐江子	元姫路市立美術館館長
	川島　周	辰野美術館学芸員
	玉富香代	豊中市都市活力部魅力文化創造課課長
	田仲佐紀子	豊中市都市活力部魅力文化創造課主事
	北　理真	豊中市都市活力部魅力文化創造課学芸員
	橋本眞次	白沙村荘橋本関雪記念館代表理事
	大野俊治	碧南市藤井達吉現代美術館特任学芸員

伊那谷展雑感

原田平作（大阪大学名誉教授）

日本の建築は平面性や屋根を特色とし、西洋の空間性や同心円状と対比される、と説いた建築史家鈴木博之（1945～2014）氏の『日本の地霊（ゲニウス・ロキ）』（講談社現代新書、1999年）は素人の私にもわかりやすい。それと同じように東洋絵画と西洋絵画を比較することは可能であり、それをおこなったものにもたびたび出会ってきたが、鈴木氏ほどに解り易いものにはまだ出会っていない。特に近代美術と言われる分野についてはまだ出会っていない。

近代については多くの場合、まず日本画と洋画が両立して語られ、彫刻と版画がそれに添えられ、やがて工芸が表面に出てきたこと、そして書について論争がしばしば行われてきたことを記すというのが一般で、特に日本画と洋画がどのように関係するのかという点については、さまざまなことが語られはするものの、鈴木氏に見られるような納得のゆく論述はまだないようである。

例えば私などは、洋画は全般に広く欧風近代と和風との間で常に対立意識があって展開されてきたのに対し、日本画はやはり基底として広く欧風近代の影響を受けながらも、それは二次的で、東京中心の場合には伝統と革新の対立意識、京都中心の場合には精神と感覚の対立意識を持ちながら展開してきたなどと述べてきた。そしてその日本画にはわずかながら工芸と共有するものが含まれていた、などとも語ってもきた。しかしながらこれらも、自分で言うのは妙かもしれないけれど、鈴木氏ほどには解り易くない。

模索中というほかはないのであるが、こんなことを申しても事実は事実で、さまざまな作品は江戸末明治以降も作られ続けており、深い浅いの違いは感ずるとは言うものの魅力ある作品は生まれ続けている。だから今回も伊那谷展というような展覧会を提案することになったのであり、理論が現実に追いついていないということであろう。

それでここで翻って、今度は具体的になぜ伊那谷なのかを中心に少し語ってみようと思うが、初めになぜ伊那谷なのかというと、京都を中心に美術の展開を考えた場合、江戸期であるならばさしずめ長崎などから時に影響を受けながら大坂・江戸へと広がり、その文化は東海道・中山道・北陸道・山陽道・四国に伸びていったと考えられる。これに対して近年はそうした広がりはメディアの流通や交通の発展などですぐにはそうは考えられず、京都・大阪というよりも京阪神を中心とした関西エリアというものが考えられ、これに対する他エリアが浮かんでくるのが一般的となっている。しかもこの関西エリアを中心に考察をおこなおうとすると、さしずめ上記諸道のどこでも良いということになり、とりあえず父の出身地で少しは承知している飯田・伊那谷を選んだということになる。それは例えば上越（新潟）でも萩・津和野（山口・島根）でも八幡浜（愛媛）でも良かった。

その飯田には戦前期・子供の頃にはよく行ったが、蚕を飼っていて桑畑から籠いっぱいに桑を入れて運んだことや、野沢菜などが出るお茶のひと時が楽しかったことが思い出される。そして成人してからはそれが一変し、リンゴ畑が近くにできてリンゴを樹からとって食べさせてもらったりしたことがあった。こんな伊那谷は例えば今度は母の出身地である亀岡（京都）と比べると、まるで違う。朝靄が深く言葉使いも京都弁でおっとりしている亀岡と、寒さは厳しいけれど湿気のない信州弁の伊那谷である。市田柿が有名になるのが良くわかる。

おっと、話があまりにも一般的・個人的になりすぎ、美術や芸術の話から飛びすぎたようである。こんな違いというようなことは、肌身では感ずるものの、作品に表れるものなのだろうかというのが、こんな体験話を出してみた所以であるが、言ってしまえばこれまでの私の考察や研究からは作品からじかにこれらの違いを語ることはできていない。作風の違いとか風土との関係とかと言っても、このような違いを作品を通して語ったことは全くなかったわけであるけれど、また翻って、選ばれた今回の作品をよく見てゆくと、それも感じられるのかもしれないとは思う。

私の研究のやり方は、体験をまとめて理屈ができればそれを展開してみたりは積極的にやってはみるが、それができなければ作品の特質をそのままとりあえず記述してみるという、両様の方法で進んできたわけであるが、今申した通り今回は後者で、本来なら選ばれた20作家に肉薄し何かの特質を指摘してみたいところであるけれど、残念ながら全体の作品をまだそれほどに見ているわけではない。それをするには本展が開催されて、作品をもっとよく見てからでないと出来そうにない。

これについて少しだけ理屈として指摘できることは、もう日本画・洋画・版画・彫刻・工芸・書などという分類から得られるものは少なく、平面・立体・インスタレーションというように分けてみたり、建築・造園やデザイン、写真、ファッション、マンガ・アニメなどを含めて芸術と日常に分けて諸作品を考えてみるほうが、実り豊かな結果が得られそうな今日の状況であるということだけである。繰り返しになるけれど、本来ならこれらを含めた新しい視点から、もう一度出品作家の作品を見直してみたいと思ってはいるのであるが、残念ながら今は出来ない。

とにもかくにもこれを機会に素晴らしい作品が出来あがったり、伊那谷と東海と関西が何らかの意味で交流が盛んになったりすれば、企画を提案してみたものとしてこれにすぐる歓びはないと申して、中途半端ながら本文を終わることとする。

artists

Ichinose Daichi

Imai Hiroyuki

Iwai Haruka

Unno Atsutaka

Urabe Fumito

Okunaka Akihito

Kajikawa Shunichiro

Kawashima Wataru

Sakai Yoshie

Shibata Chikako

Nakajima Mugi

Nakaya Yuko

Nagahara Tomihiro

Nishihisamatsu Ryo

Nojima Arata

Nohara Tokuma

Hachiya Mitsushi

Hayashi Mayuko

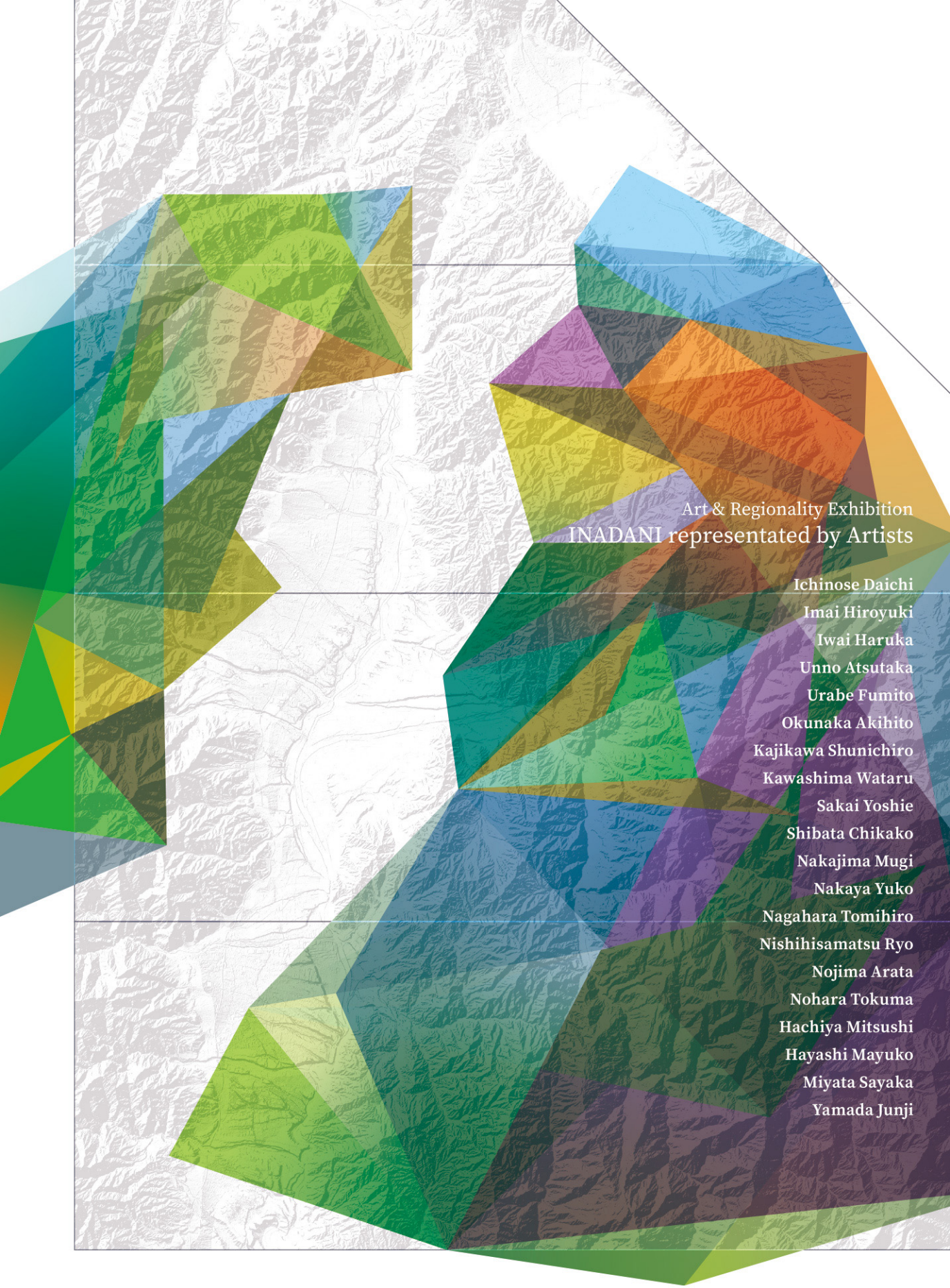
Miyata Sayaka

Yamada Junji

出品作家一覧 （五十音順）

一瀬大智 …… 10
今井裕之 …… 14
岩井晴香 …… 18
海野厚敬 …… 22
占部史人 …… 26
奥中章人 …… 30
梶川俊一郎 …… 34
川嶋　涉 …… 38
坂井淑恵 …… 42
柴田知佳子 …… 46
中島　麦 …… 50
中谷ゆうこ …… 54
永原トミヒロ …… 58
西久松　綾 …… 62
野嶋　革 …… 66
野原都久馬 …… 70
蜂谷充志 …… 74
林　繭子 …… 78
宮田彩加 …… 82
山田純嗣 …… 86

※本図録の掲載図版は、編集上の都合により、本展出品作とは必ずしも一致しません。



Art & Regionality Exhibition

INADANI representated by Artists

Ichinose Daichi
Imai Hiroyuki
Iwai Haruka
Unno Atsutaka
Urabe Fumito
Okunaka Akihito
Kajikawa Shunichiro
Kawashima Wataru
Sakai Yoshie
Shibata Chikako
Nakajima Mugi
Nakaya Yuko
Nagahara Tomihiro
Nishihisamatsu Ryo
Nojima Arata
Nohara Tokuma
Hachiya Mitsushi
Hayashi Mayuko
Miyata Sayaka
Yamada Junji